

SEEDS

 知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

No.221
2014 / 冬号

自然特集
知床のジビエ～エゾシカ編～

活動レポート
世界一の越冬地 知床でのワシ調査

>>知床・人・インタビュー 第18回
中川 元さん

>>スタッフの本棚 第11回
ジョン・ミューア・トレイルを行く

>>知床財団 購買部
「知床かばん」出来ました

>>スタッフは見た！ 第8回
巨大なキノコの使い方



■写真 2013年12月15日に天国に旅立ったヒグマ対策犬レブン（写真提供：Michio HINO）



スケトウダラ漁船とワシ

知床財団は、何を調べているの？

越冬地でのワシの調査は、その個体数を把握することが第一の目です。

1980年代、羅臼では二千羽を超えるオオワシが飛来し、越冬していました。当時推定されていましたが、実は多くは、人間活動によって得られる餌を利用していました。1980年代に多くのワシが羅臼で越冬していたところは、羅臼でスケトウダラが大豊漁だった時期に重なります。ワシたちは、漁船からこぼれ落ちる魚などをねらって食べていました。そして、スケトウダラの漁獲量が減るとともに、羅臼でのワシの確認数も減少していきます。また近年では、観光船がワシを集めるために与えるエサに、ワシたちが集中するという状況があります。

一方、夏はどうかというと、冬の調査区間と同じ地域には、たつた数つがいのオジロワシが残るのみとなり、それぞれテリトリリーをもつて巣作りをし、子育てをしています。

このように夏と冬では、羅臼でのワシの数はまったく違うのです。

ワシは羅臼で何しているの？

知床で観察できるワシの多くは、越冬のために大陸から渡ってくるワシたちです。オジロワシとオオワシは、魚などを主食としているため、海ワシ類と呼ばれています。ここ知床にやってくるのも、この海にとても豊かな餌資源があるからです。

1980年代、羅臼では二千羽を超えるオオワシが飛来し、越冬していました。当時推定されていましたが、実は多くは、人間活動で越冬していたことになります。これはすごいことです！

ワシはどこで越冬しているの？

ワシたちは、もちろん自ら魚類や海鳥を捕獲して食べることもありますが、実は多くは、人間活動によって得られる餌を利用しています。1980年代に多くのワシが羅臼で越冬していたところは、羅臼でスケトウダラが大豊漁だった時期に重なります。ワシたちは、漁船からこぼれ落ちる魚などをねらって食べていました。そして、スケトウダラの漁獲量が減るとともに、羅臼でのワシの確認数も減少していきます。また近年では、観光船がワシを集めるために与えるエサに、ワシたちが集中するという状況があります。

一方、夏はどうかというと、冬の調査区間と同じ地域には、たつた数つがいのオジロワシが残るのみとなり、それぞれテリトリリーをもつて巣作りをし、子育てをしています。

このように夏と冬では、羅臼でのワシの数はまったく違うのです。



海上のワシをカウントするスタッフたち

町内の木にとまるワシ。通称「ワシのなる木」



スコープを通して見えるオオワシ

ワシはどれくらいいるの？

当然のことながら、調査は真冬に外で行います。フィールドスコープや双眼鏡でワシを観察するわけですから、あまり激しい動きをするわけでもなく、寒さに耐えながら行ないます。

調査する人は、真冬に、時にはブリザードが吹き荒れる中、スコープをたてて、遠く流水の上にいるワシたちの数を数えます。ゴマ粒ほどにしか見えなくても、毎日見ていると、ちゃんとワシわかるようになります。



左：オオワシ 右：オジロワシ

活動レポート

世界一の越冬地 知床でのワシ調査

文・坂部皆子 羅臼地区事業係主任

皆さん、オジロワシとオオワシがどんな鳥か、ご存じでしょうか？

知床半島の東側、羅臼町の沿岸では、冬になると2種類の大型のワシが町内の至る所でみられるようになります。翼を広げると2メートルあまりにもなるこのワシたちは、毎年変わらず羅臼町にやってきて、冬を越します。

今回は、私たちが行なっているこのワシたちの調査について紹介します。

オジロワシとオオワシ

この2種のワシ、分類的にはどちらもタカ目タカ科オジロワシ属に属する大型のワシで、大きさや生態などはよく似ているように見えます。しかし、世界的にみるとその分布域は、全く異なることがわかります。

オジロワシは、ヨーロッパからアジア周辺にかけて、ユーラシア大陸を含む広範囲な分布域を持つ種です。対するオオワシは、対するオオワシは、どちらもタカ目タカ科オジロワシ属に属する大型のワシで、大きさや生態などはよく似ているように見えます。しかし、世界的にみるとその分布域は、全く異なることがわかります。

オジロワシは、ヨーロッパからアジア周辺にかけて、ユーラシア大陸を含む広範囲な分布域を持つ種です。対するオオワシは、どちらもタカ目タカ科オジロワシ属に属する大型のワシで、大きさや生態などはよく似ているように見えます。しかし、世界的にみるとその分布域は、全く異なることがわかります。

オオワシの分布

● 繁殖地 ● 越冬地 ● 繁殖地 & 越冬地

オジロワシの分布

● 繁殖地 ● 越冬地 ● 繁殖地 & 越冬地

(出典：『Raptors of the World』 James Ferguson-Lees, David A. Christie, Houghton Mifflin Harcourt, 2001)

限定的な生息域にしかいないことと、その美しい姿から、オオワシはヨーロッパのバードウォッチャーのあこがれの鳥でもあります。

ワシはヨーロッパのバードウォッチャーのあこがれの鳥でもあります。



密集するワシ類と感染症のリスク

文：石名坂 豪
(保護管理研究係主任、獣医師、獣医学博士)

近年、冬の羅臼では餌づけなどにより、オオワシやオジロワシが狭い流氷上に密集する状況が続いています。流氷上に突然現れた大量の餌の周りにはカラスやカモメ類も集まるため、複数の種の鳥が、通常の自然界ではありえないくらい多数密集するような状態です。もしこの中に、「高病原性鳥インフルエンザ」などの感染症に罹患した鳥がまぎれこんだらどうなるでしょう？急速な感染拡大の結果、バタバタとワシ類が大量死するような事態の発生も、予測しておかなくてはいけません。

3年前、知床と同じ道東の浜中町や厚岸町では、オオハクチョウやスズガモが高病原性鳥インフルエンザによって少なくとも9羽死亡し、感染個体の死体が既に他の鳥に食われていた事例もありました。病気の鳥を食べてウイルスを取り込んだカラスやワシが、近隣から知床へ飛んでくる可能性は十分考え

られたため、「いつ羅臼で鳥たちが死に始めるか」と、私はヒヤヒヤしながら見守っていたものです。

鳥が持っている病原体は高病原性鳥インフルエンザウイルスだけとは限りません。鳥から鳥へうつる病気はもちろん、鳥から人へうつる病気にも様々な種類があります。密集した鳥たちのすぐ近くで観光客が写真を撮っているような状況は、実はとても危険だと私は考えています。

野生鳥獣への餌づけ行為が最終的に多くの悲劇を生んできることは、過去に全国で起きた様々な事例が示しています。まさにその悲劇が、近い将来羅臼で現実にならないか、私は心配しています。

私は知床で活動する知床財団職員のひとりとして、今後、この問題をどのように解決していくならよいか、地域の皆様と相談しながら、一緒に考えていくたいと思っています。

私は1997年の冬の羅臼で、はじめてオジロワシとオオワシを見ました。何羽もの大型の猛禽類が悠然と、抜けるような青い天空を舞う姿には、言葉が出ないほど感動したことを今でも覚えています。その年から、ずっと私は越冬期のワシの調査を続けています。

ワシたちの重要な越冬地であるこの地で、毎年同じように繰り返される彼らの飛来の状況を詳しく観察し続けることで、見えてくることがあります。

一時期2000羽以上のワシが越冬していた羅臼に、今は700羽ほどしか飛来しなくなつたといふことは、ワシたちの個体数は激減したのでしょうか？ 答えはノーです。ワシたちは北海道の各地に分散して越冬していることが報告されています。このように、個体数全体が増減したのではなく、越冬する場所が分散した結果だとうことは、長年調査を行っているからこそわかることなのです。

オジロワシやオオワシのような大型の猛禽類の行く手には、今後もたくさんの課題が待ち受けているでしょう。それは地球温暖化による環境の変化であったり、鉛中毒や交通事故、餌やりによる過度の集中といった人為的な影響など、決して一様ではありません。このような彼らを取り巻く環境を含め、私たちはこれからも、ワシたちの大越冬地、羅臼で注意深くワシたちを観察し、記録し、そしてそれらの記録を発信し続けたいと思っています。

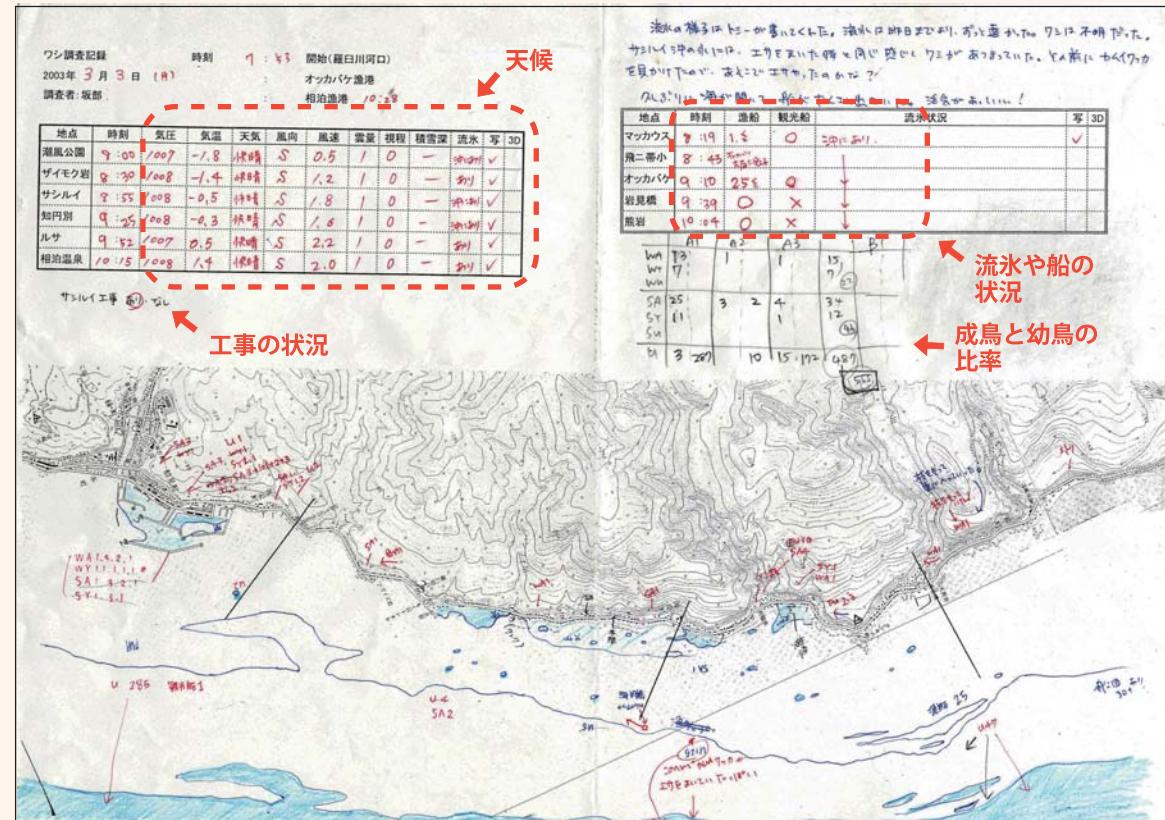
調査から思うこと

細々とではありますが、それでも、見続けることに大きな意味があると思っています。もしオジロワシとオオワシの飛来数のバランスが変わったり、今年生まれの幼鳥の比率が極端に低くなつたりしたら、私は営巣地で何か大きなアクシデントがあったのではないか？と推測します。

この年は、3月2日に766羽を数えたのが、最も多い数でした。このうちの実に602羽が、観光船の周りに集まつてゐる状況も分かりました。このような調査によって、餌の少ない越冬期にいかにワシたちが、かんたんに得られる人為的な餌資源に高密度に集中しているのかを知ることができます。

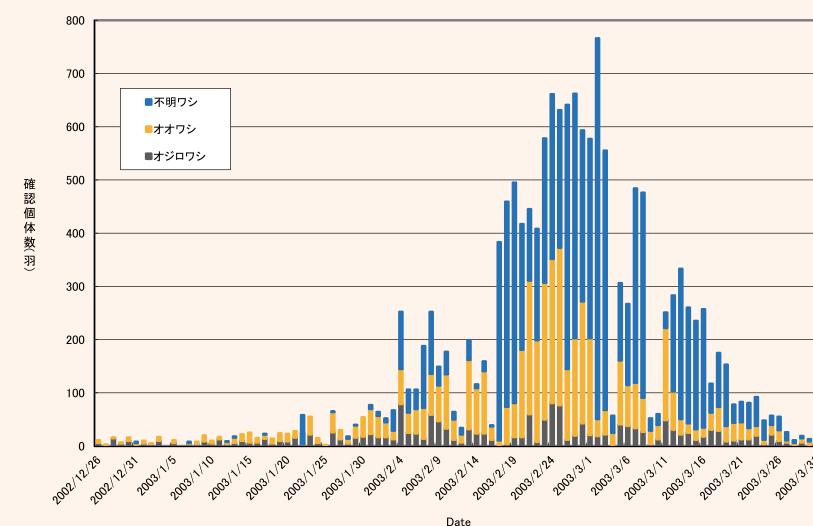
越冬期の調査では、個体数を把握するとともに、このような観光船の出航状況、調査区間内の工事の状況などもなるべく細かく記録していきます。

これを集計してグラフにします。これは私が111日間、毎日欠かさず調査を実施した2002年度の結果です。



記録用紙にはワシがいた場所とその数を記入します。流氷の状況や漁船、観光船の出航状況、調査区間内の工事の状況などもなるべく細かく記録していきます。

これを集計してグラフにします。これは私が111日間、毎日欠かさず調査を実施した2002年度の結果です。



そうやって、カウントしたワシの調査の結果を記録用紙に記入します。